(様式２)

Clostridium perfringens による牛の壊疽性乳房炎の一事例：長野県伊那家保　青山真理恵

2018年10月初旬に管内酪農家で分娩間近の初妊牛が高熱、元気消失、食欲廃絶、右前後乳房が冷感で暗紫色を呈し、ガス貯留。乳汁は暗赤色で強い腐敗臭を確認。乳汁の細菌検査で好気培養にて検出限界以下。嫌気培養で *Clostridium perfringens*（CP）A型菌を 2×10^{4}cfu/ml以上分離。担当獣医師が抗生剤及びステロイド剤投与、乳房内洗浄するも右側乳房から下腹部及び臀部の広範囲が浮腫で、泌乳停止となり初診日から2週間後に病畜出荷。乳房を含む各臓器の細菌検査で乳房からCP及び *E.coli* を多数分離。乳房の組織検査では急性炎症像とともに、乳腺の壊死、グラム陽性大桿菌がみられ、二次感染と思われる多数のグラム陰性桿菌及びグラム陽性球菌を確認。以上から本症をCPによる壊疽性乳房炎と診断。本例のように急性臨床型乳房炎症状を呈しているものの、乳汁の好気培養で検出限界以下であれば、嫌気培養することが必要と考察。